

海外留学 体験記



平成26年11月

公益財団法人福井県アジア人材基金

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国后面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

【 目 次 】

※平成26年11月現在

ページ	氏名	大学名	学部	留学先	留学期間など
1	S・I さん	福井県立大学	経済学部 4年	浙江财经大学（中国）	H25.2～H26.1 （交換留学）
4	鈴木 敬大 さん	早稲田大学	国際教養学部 3年	オレゴン大学 （アメリカ）	H25.9～H26.6 （交換留学）
9	山田 雅和 さん	國學院大學	経済学部 3年	キングス・カレッジ・ロンドン （イギリス）	H25.9～H26.8 （私費留学）
13	M・N さん	東京外国語大学	外国語学部 3年	フィリピン大学 （フィリピン）	H25.10～H26.9 （交換留学）
17	渡辺 絵理 さん	関西外国語大学	英語キャリア学部 4年	クイーンズランド大学 （オーストラリア）	H25.10～H26.6 （交換留学）
20	上田 つぐみさん	福井県立大学	経済学部 3年	CARTHEL CNE1 （フィリピン）	H26.2～H26.8 （私費留学）
23	滝川 直樹 さん	福井県立大学	経済学部 3年	ILAC （カナダ）	H26.3～H26.6 （私費留学）

福井県アジア人材基金の海外留学奨学金を活用して長期留学した学生の皆さんの体験談が、動画でご覧いただけます。

今後、公開件数を順次増やしていく予定です。

詳しくは、 [福井県アジア人材基金 youtube](#) [検索](#) ←

留学体験談 ～ 交換留学 ～

S・Iさん（福井県立大学 経済学部 4年・福井市出身）

①留学先・期間

- ・浙江財経大学（中国）に、2年生の後期終了後から1年間交換留学（H25.2～H26.1）
- ・休学せずに留学したため、福井県立大学を4年間で卒業し、平成27年春に就職予定。

②留学の動機

- ・大学1年生時に第2外国語で中国語を履修していた。当時の先生の講義が面白く、中国語や中国に興味を持つきっかけになった。
- ・また、2年生の夏季休暇、大学の語学研修プログラムを利用しアメリカへ4週間英語を学びに行った。帰国後、4週間では短いということや、漠然とちょっと長い期間どこかの国に身を置いてみたいということを思うようになる。
- ・2年生の後期開始と同時期に、来期からの交換留學生の学内募集が始まった。部活の先輩に、「浙江財経大学」での1年間の交換留学を終えた方がいらっしやったので、いろいろと話を聞き、同大学に留学することを決意した。

③学校での授業、学生生活

- ・主に外国人留學生を対象とした留學生向けの中国語の授業を受けた。前期は中国語の他に中国概論や中国文化を学ぶ授業が用意されていたが、使用言語はすべて英語だった。
- ・クラスメートは、ソマリランド、カメルーン、マリ、ジブチと、自分を除いては全員アフリカからの留學生であった。
- ・授業の一環として、浙江省の博物館などを訪れるツアーのようなものが月一回ほどあった。
- ・留學生向けの中国語の授業は、日本で学んでいた内容と比べて、レベルが高くないように感じた。このため、大学側に通常の授業とは別に自分用のクラスを作ってほしいとお願いし、先生にマンツーマン形式で指導を受ける特別クラスを用意してもらった。自分の中国語レベルが上がっていくにつれて、通常の授業には出なくなっていくが、通常の授業で基礎をしっかりと学んだことが、後からの学習にとっても役に立ったと思う。

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

- ・後期からは、自習を中心に学業に励んだ。中国語の授業には出席しなかったが、習字や体育（サッカー）の授業には出席した。
- ・学内の日本語サークルが、ほぼ毎週の活動をしていたので、それに参加した。この他にも、韓国文化のサークルに参加していた。
- ・浙江財経大学では、日本人学生が1人ということで、中国の学生も興味を持ってもらえ、比較的早い段階からたくさんの友達ができただ。
- ・自習はいつも図書館で、現地の中国人の学生と一緒に勉強していた。
- ・アメリカやシンガポール出身の華人の学生たちと、毎週一緒に集まって、中国語でディスカッションなんかもしていた。
- ・語学力の上達レベルとしては、新しいHSK（中国政府公認資格の検定制度）で3級・4級を平成25年6月に取得、5級を同10月に取得、そして6級を26年1月に取得するなど、留学中にしっかり成果が残せたと思う。

④日常生活

- ・10月中旬までは、外国人教師用の寮に住ませてもらい、2部屋にトイレ・バスルーム・キッチンがあった。しかも、家賃、光熱費、インターネット代等住居費にかかる全てが無料という高待遇だった。ちなみに、近くの部屋に住んでいた外国人教師は、日本、アメリカ、カナダ、イギリス出身の方が各1人ずつだった。
- ・外国人教師用の寮で過ごしていたところ、突然先生に「今日中に学生寮に引っ越してほしい」と言われ、引っ越すこととなった。また、学生寮に移ってからは、インターネットや光熱費・寮費を支払う必要があった。寮費は、1人部屋で半年間1200元。この寮には、主に中国人の大学院生と外国人留学生が住んでいた。
- ・留学期間中はすべて外食で、大学の食堂や付近の店で済ませれば1日30元程度で安価だった。
- ・夏季長期休暇と冬季長期休暇の期間中は、大学から人がほとんどいなくなる。現地の友達もほとんど故郷などに帰ってしまうので、現地の友達の地元へ遊びに行ったり、旅行をしたりしながら楽しんだ。
- ・普段の日常生活は、キャンパス周辺と寮内で完結してしまうほど、スーパー・理容室・携帯ショップ等なんでも揃っている便利な環境だった。

⑤留学して良かったと感じること

- ・中国をはじめ、アフリカなどさまざまな国や地域の人の考え方や価値観を知ることができ、視野が広がったと思う。

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

- ・帰国後に就職活動を行ったところ、現地で高めた中国語の能力が評価され、しっかりと学んだ意義を感じた。

⑥今後について

- ・県内の会社（製造業）に入社予定。中国駐在を前提として採用してもらったと聞いているので、残りの学生生活も中国語や英語など、引き続き語学学習を継続しながら、さらなるレベルアップを目指していきたい。

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国后面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

留学体験談 ～ 交換留学 ～

鈴木 敬大さん（早稲田大学 国際教養学部 3年・鯖江市出身）

①留学先・期間

- ・早稲田大学のT S A制度を利用して、2年生後期から交換留学生としてアメリカのオレゴン大学に10か月間留学（H25.9～H26.6）
- ・休学せずに留学したため、現在は3年生。平成28年春に卒業予定。

②留学の動機

- ・小さいころから英語が好きで、中学、高校と一生懸命勉強しており、念願がかなって、早稲田大学の国際教養学部に入學した。
- ・英語をネイティブな環境でしっかり学びたいと考え、早稲田大学のT S A制度を利用してアメリカに留学しようと志した。T S Aは、留学中における早稲田大学の学費は不要だが、留学先にて授業料を支払う制度。
- ・在籍する国際教養学部では、全員が2年生時に1年間留学することを前提としたカリキュラムを導入しており、留学しても4年間で卒業可能。また、国際教養学部には1学年600名程度いるが、帰国子女の割合が高い上、外国人留学生の数も多く、非常に国際的な雰囲気満ちている。自分もおのずと海外留学の意欲がわいてきた。

③学校での授業、学生生活

- ・オレゴン大学では、英語の授業だけでなく、「地理」、「経済」、「数学」、「言語学」といった一般教養科目も受講。3学期制を採用しており、学期ごとに12～16単位程度が早稲田大学の単位として互換認定された。
- ・オレゴン大学の教員の英語が聞き取れるようになるまでに、およそ3か月を要したと思う。また、何とか英語で自分の考えを伝えられるようになるまでに6か月程度はかかった。
- ・留学中は、午後の授業が終わってからも、図書館で勉強を続け、19時ごろまでは大学に残っていた。
- ・授業によっては、同じ週内に3回あり、2回は大人数での講義、もう1回は少人数でのディスカッション。ディスカッションでは、とにかく自分の意見を口にしないと評価されないのので、他の学生の間を割ってでも話に参加するよう努力した。

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

- ・英語が聞き取れない中、予習、復習に非常に多くの時間を費やした。また、オフィスアワーなどに教授の研究室を訪れ、自分が授業の英語を100%理解できていないことを相談すると、アルバイト学生が書きつづった講義ノートのコピーをもらえたので、こちらを活用して学期末のテストに励むなど、単位取得のために自分なりに工夫した。
- ・オレゴン大学には、自分と同時期に、早稲田大学から約30名が留学。日本人留学生の総数は100名ほどだったと思う。その他の留学生の出身国としては、中国やサウジアラビア、韓国などが目立った。
- ・周囲の日本人留学生とは、お互いに日本語は話さないように努めていたが、今になってみると、彼らとの日本語での会話が良い息抜きになっていたと思う。



〔日本と風情が異なる(?) オレゴンの雪景色(写真中央)〕

④日常生活

- ・早稲田大学の方針により、留学してから3か月間は必ず現地でホームステイをすることとなっており、4か月目からは、寮に移ることも可能。自分は、

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

警官の夫と、裁判所事務の妻の家庭にホームステイした。

- ・ホームステイ先には、朝・夕食付きで月に6万円を支払っていた。夫妻は、外泊を認めてくれたり、友人をホームステイ先に招くこともOKだったりと、自分の好きなようにさせてくれたので、非常に居心地がよかった。また、ラザニア、チキングリルといった食事にも美味しかったため、留学期間中はずっとこの家庭でのホームステイを続けた。ほかの日本人留学生の中には、ホームステイ先が食事をまともに用意しない、勉強したい時間帯に託児を強要される、などのトラブルに見舞われる者もあり、ホームステイ先を変えたりしたようだ。
- ・現地の物価については、特に食事が高いと感じた。店内飲食の場合だと、ハンバーガーショップでも最低10ドル、大学の学食でも7～8ドルはかかる。自分の場合、ホームステイ先の夫妻が、キッチンにある食品をランチとして持ち出すことを許してくれていたもので、本当に助かった。
- ・オレゴン大学のキャンパスは非常に広大で、一つの街のよう。また、生協の品揃えも良く、日常生活の多くは学内でまかなえる便利な環境であった。
- ・自分も周囲も、平日は勉強一色だったが、金曜の夕方から週末にかけては、パーティ、観光、ドライブなど、力いっぱい遊んだ。また、学期間の休暇（冬休み、春休み）には、アメリカ人の友人たちと一緒に車で、ラスベガスやサン・ディエゴまで、はるばる何日もかけて遊びに出かけ、良い思い出づくりができた。
- ・キャンパス近くに農場を経営する女性のもとで、機械に頼らない野菜作りのボランティアに励んだ。加えて、大学の日本語の授業のアシスタントもボランティアで務め、日本語を学ぶアメリカ人に文化指導などを行っていた。
- ・とはいえ、当初は、アメリカ人の友人を作るのにとても苦労した。特に差別意識は感じなかったが、自分を含めた外国人に対して、アメリカ人はなかなか心を開かないところがあるなど感じた。そこで、留学生と現地学生を結び付けるサークルに入ることによって、アメリカ人の友人をつくることができた。

⑤留学して良かったと感じること

- ・英語力はもちろんであるが、言葉がなかなか通じない中で、何とかして授業の単位を取得する方法を自分なりに考え、成果を残せたことが自信となった（教官に相談する、ボイスレコーダーで録音してひたすら聞き直して復習する、など）。日本人留学生の中には、日本人ばかりと行動してあまり英語を使わず、授業も理解できないまま単位を落とす者もいると聞いていた。
- ・留学先で知り合った友人たちとの人脈は、これからの人生において、大いに

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

助けになると思う。例えば、社会人として国境を超えた仕事をする時に、海外の各地に友人がいれば、情報を集めたりする際に、力強い支援が得られるとを感じる。



〔留学先で国籍の異なる仲間とサッカーを楽しむ（写真後列・右から4人目）〕

- ・人種や文化の多様性が当たり前のアメリカで生活したことにより、価値観が大きく変化したと実感できる。日本は、まだまだ「日本語ばかり」、「日本のことばかり」という印象が強いが、そうした考え方にとらわれたくないという気持ちが強くなった。

⑥今後について

- ・留学前の英語力はTOEFL 71点（120点満点）で、国際教養学部 of 学生の中ではさほど高くないレベルだった。しかし、帰国後に受けたTOEICは990点中850点（TOEFL換算で96点）と、成果があった。ただ、学部内では、例えば、「TOEICで900点あることが就職活動を有利に進める上で必要だ」とも聞いているので、これからも勉強を続け、ハイス

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

コアを目指したい。

- ・1年ではまだまだ学び足りないと感じている。自分の人生の中で、もう一度アメリカで生活するチャンスを目指したい。
- ・現在3年生であり、来年4月から就職活動を始める予定だが、やはり国際ビジネスを行っている商社などを目指している。なお、福井県に本社がある企業の役員の方に、同社が手がける海外事業の話を伺う機会があった。海外での営業の苦労話などは、聞いていて本当に興味が持てたので、こうした経験ができる企業に就職できればと考えている。

鈴木敬大さんの留学体験談が、動画でご覧いただけます。

詳しくは、 [福井県アジア人材基金 youtube](#) [検索](#)

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

留学体験談 ～ 私費留学 ～

山田 雅和さん（國學院大學 経済学部 4年・鯖江市出身）

①留学先・期間

- ・イギリスの語学学校「Kings Colleges London」に、3年生の後期から1年間休学し、私費留学（H25.9～H26.8）

②留学の動機

- ・留学しようと志したのは、自分に英語力や国際感覚という付加価値を付け、就職活動などで「武器」として生かしたいと考えたため。また、アメリカに1年間留学した経験のある先輩からいろいろと話を聞き、留学を決心した。
- ・留学先は雑誌「留学ジャーナル」のカウンセラーセンター（相談窓口）を通じて決定。留学先の選ぶに当たっては、「日本人が少ない」、「アジア人が少ない」ことを優先した。なお、アメリカには日本人、アジア系の留学生が多いと聞いていたため、イギリスを選んだ。入学した語学学校には400名ほど外国人留学生がいたが、日本人は3名、アジア人は20％程度であり、大半はヨーロッパの各国から来ていた。

③学校での授業、学生生活

- ・語学学校では、毎週月曜日の1限に英語テストがあり、その点数に応じて週ごとにクラスが変わった。
- ・授業はクラスごとに5～12名程度の少人数で行われ、90分・1コマ。午前中はスタンダードな英語の授業で、会話を重視した内容だった。また、午後は専門的な分野の英語を学べたので、ビジネス英語のクラスを選択した。特に実践的なビジネス英語の授業では、先生と一緒に現地の銀行を訪問し、行員と英会話を行うなど、充実した内容だった。
- ・留学中は、就職に有利と聞いていた700点超えを目指して英語の勉強に励んだ。
- ・留学して3か月程度で聞き取り力が向上し、6か月経つころには英語で何とか会話できるレベルまで上達した。
- ・留学を通じて、日常会話に困らない程度の英語力が身に付き、英語での対人コミュニケーションができるようになった。ただ、現地のイギリス人同士の会話や、英語のテレビ・映画などは、早口なのでまだついていけないところ

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

がある。

- ・現地では、英語力を効果的に高めるため、様々な出身国の留学生との英会話を心がけた。また、内容を理解できなかった英語の授業があったら、後で先生に個別にお願いして、無料で個人レッスンをしてもらうなど、学び方を工夫した。

④日常生活

- ・留学先では、ホームステイを選択し、最初の半年間は留学先の語学学校の教員を退職した老年夫婦宅に、残り半年は国際カメラマンと看護師の夫婦宅に滞在した。ホストファミリーは語学学校が決めるが、どのような家庭が良いか、希望を聞いてそれなりに反映してくれた。
- ・ホストファミリーを変更した理由は、老年夫婦が非常に良く面倒を見てくれ、「甘えの意識」が芽生えてきたと感じたため。
- ・ホームステイ先では、朝・夕食の用意や洗濯の世話をしてくれ、月に8万円程度の家賃を語学学校経由で支払った。ちなみに、イギリス人はあまり自分で料理をしないという印象で、冷凍食品が多かった。
- ・イギリスでは7～9月やクリスマス期間中のホームステイ料金が2～3割増しの「ハイシーズン価格」になる。本来は長期バカンスに出たい時期だが、ホームステイの受入れのために出かけられないという名目で、割増料金となると聞いた。
- ・学外活動については、語学学校の用意するアクティビティは充実しており、自分の好きなサッカーサークルの活動や、週末に先生と学生と一緒にロンドン市内を巡るツアーなどに参加した。「自分はこんなことがしたい」と学校に相談すれば、いろいろと紹介してもらえたので、充実した毎日を送る上で役に立った。
- ・イギリスは全体的に物価が高いと思う。特に感じたのが公共交通機関で、電車の初乗り運賃が500円ほどかかり、自分にとっては経済的な負担が大きかった。
- ・年末年始の休暇期間と帰国前を利用して、ヨーロッパ各国を旅行した。6か月間以上イギリスに滞在する外国人は、ヨーロッパ各国を結ぶ鉄道に2週間乗り放題のパスを3万円ほどで購入できる制度があり、スペイン、イタリア、フランス、ドイツ、スイス、オーストリア、ハンガリー、チェコなどを周遊した。また、旅先では、語学学校で出会ったスペイン人をはじめとする友人の自宅を訪れ、宿泊させてもらうなど、費用を抑えた。
- ・年末の旅行中に、スペインでパスポートや現金の盗難被害にあった。パスポ

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

ートは、マドリードにある日本大使館で再発行してもらうなど本当に苦労したが、現地の警察署に盗難届を出す際に、自分の英語がそれなりに通用したので、語学力アップの手ごたえを感じる機会にもなった。

- ・留学中は、ヨーロッパ各国出身の留学生から、たびたび「自分の考えをしっかりと伝える」よう指摘された。恥ずかしさもあったが、自分の英語力が足りない面もあり、もどかしい気持ちだった。



〔サッカーの本場・イギリスにて友人と試合を観戦（写真右側）〕

⑤留学して良かったと感じること

- ・留学を通じて、自分で目標を設定し、それに向かって努力、達成しようとする姿勢が身に付いた。具体的には、「月曜日のテストで〇〇点をとる」という目標を掲げ、テストまでにいくつ単語を覚える、何時間勉強する、という頑張りをやりぬくこと。
- ・自分自身は、もともとおとなしい性格であるが、積極的になったと思う。よく理解できなかった授業の後に、自分から先生に個人レッスンをお願いしたり、レッスンの成果を把握するために自分から先生に臨時テストをお願いしたりなどは、留学前にはとても考えられなかったことだと思う。
- ・また、留学先の学校は、日本人が少なく、学生の国籍にあまり偏りのない環境だったため、バラエティーに富んだ国民性や価値観を体感できた。今では

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

物事を考える際に、世界を「ものさし」として考えられるようになった。

- ・現地で知り合った外国人の友人とは、帰国後もスカイプなどを活用して英語で会話をしたり、フェイスブックでつながりを保っている。この9月には、イタリア人、韓国人の友人がはるばる東京に遊びに来てくれたほどで、今後も世界各地の友人との関係を大事にしていきたい。



〔留学中はさまざまな国々を観光。トルコでの1枚（写真中央）〕

⑥今後について

- ・この10月から大学に復学した。経済学部生であるが、文学部（外国語文化学科）の授業も履修するなど、さらなる英語力のレベルアップを目指して努力を続けたいと考えている。
- ・来年4月からは、本格的に就職活動を始める予定であり、すでに就活の終わった同級生にいろいろ体験談などを聞きながら、準備を進めているところ。まだ就職先の具体的なジャンルなどは決めていないが、福井県内で内定がとれるように頑張りたい。

山田雅和さんの留学体験談が、動画でご覧いただけます（近日公開予定）。

詳しくは、[福井県アジア人材基金 youtube](#) [検索](#)

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

留学体験談 ～ 交換留学 ～

M・Nさん（東京外国語大学 外国語学部 3年・鯖江市出身）

①留学先・期間

- ・国立フィリピン大学（フィリピン共和国）に、3年生の後期から交換留学（H25.10～H26.9）
- ・休学して留学したため、現在、3年生。平成28年春に卒業予定。

②留学の動機

- ・大学でフィリピン語を専攻しており、タガログ語はもちろん、フィリピンの歴史や文化、国民性をしっかり学びたいため、大学の協定校であり、フィリピン唯一の国立大学であるフィリピン大学に留学した。
- ・なお、交換留学であったが、東京外国語大学を3年次生後期から1年間休学した。このため、現在も3年次生のまま。

③学校での授業、学生生活

- ・交換留学であったが、授業料はフィリピン大学に支払う形での留学だった（1コマつきいくら支払うという形式）。
- ・東京外大のフィリピン語専攻は同じ学年に19名いるが、そのほとんどがフィリピンを含め、海外に長期留学する。同じ時期に、自分を含め11名がフィリピン大学に留学した。フィリピン以外の国としては、シンガポール、スペイン、アイルランド等の国々に留学した学生がいる。
- ・他の国の留学生としては、韓国出身者が多かった。欧米圏からの留学生は比較的少なく、アジア圏からの留学生が多いように感じた。それは、フィリピンが英語を安価に学べる環境であることが影響していると思う。街では至る所で英語やタガログ語を教える語学学校を見つけることができ、授業料は1時間のマンツーマンレッスンを500円ほどで受けることもできる。
- ・キャンパスはマニラ近郊のケソンにあり、とても広大で、授業ごとにバスで移動して教室に向かうほどだった。
- ・講義は多くて15名程度の少人数形式で、単に講義を聞いているだけでなく、グループに分かれたプレゼンテーションやグループワークでの課題があり、準備が大変だった。
- ・フィリピンの公用語はタガログ語と英語であり、英語で行われる講義をいろ

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

いろ受講した。英語でエッセーを書く授業や、観光学、フィリピンの文化学など。留学開始当時の英語力は、大学受験のために身に付けたもので、ライティングやリーディングは問題ないものの、スピーキングやリスニングなどの実践的なレベルに関してはあまり高いとは言えなかった。

- ・教員の英語は、フィリピンなまりを感じることもあったが、その点は教員によって個人差がある。非常にきれいなアメリカアクセントの英語を話す先生も多い。授業が何語で行われるのか、というのは授業登録時にシラバスで確認できるので、英語・タガログ語のどちらを学びたいかによって選択することができる。留学生の自分が他のフィリピン人学生についていくのは大変だったので、予習・復習に多くの時間を使った。
- ・フィリピン人の学生は、授業中にいつ発言を求められても、何らかの回答をしていた。日本の大学のように、広い教室で何百人もの学生が受講するという授業形態はなく、少人数のなかで各々の意見を交換することを求められる。その点は、日本人の学生に欠けている姿勢かも知れないと感じた。
- ・留学開始時点では、フィリピン大学の学期制は6～10月、11～3月の2学期制で、4～5月は夏休みだった。しかし留学開始後に、学期制が変更され、8～12月、1～5月の2学期制（6～7月は夏休み）となった。このため、3月までは講義を受講できたが、4月以降の講義が開講されず、フィリピン大学での授業がストップしてしまった。
- ・この変更については、東京外国語大学側も知らされていなかったようで、一緒に留学していた日本人学生がみな窮地に立たされた。仕方がないので、自分は民間の語学学校に入学し、英語を学ぶこととした。

④日常生活

- ・留学先の住まいは、大学から徒歩15分、そこからさらにジープニーという乗り合いバスのようなものに乗って5分くらいのところにあった「ボーディングハウス」という形式の貸し部屋を利用。1軒の民家に5部屋あり、当時はすべて日本人留学生が借りていた。大家さんが用意してくれる食事付きで、月に2万円ほどと安価であった。東京外国語大学から留学する学生が代々使っているハウスで、自分も先輩から譲り受けた。大家さんは、きれいに使ってくれる日本人に貸したがつている様子だった。
- ・ただ、建物は古く、シャワーがなかったので、バケツに水を張って、シャワーがわりに使っていた。また、台風の際は、雨風が屋内に入ってくる状況。エアコンもなかった。ただ、家賃が高いところであれば、お湯の出るシャワーやエアコンのついているボーディングハウスもある。空き部屋のある家で

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

あれば、「for rent」の貼り紙が貼られているので部屋探しも意外とスムーズにできる。

- ・講義が開講されなかった4月以降は、東京外国語大学の学生と一緒にフィリピン各地を観光した。身に付けたタガログ語は、地域によって方言の違いがあり、通じないこともあった。
- ・マニラ周辺は、決して治安がいいとは言えない（拳銃所持、強盗、スリ、ストリートチルドレンなど）が、身なりや行動などに気をつけていれば被害に遭うことはあまりない。フィリピン各地を旅行で訪れると、マニラ以外はさほど治安が悪くないように感じた。
- ・現地の学生の紹介で、日系企業のアルバイトを1週間ほど経験した。日本で看護師や介護士として働きたいフィリピン人向けの説明会の手伝いで、日本にいたときのアルバイトと同じくらいの時給であった。現地の給料水準はまだまだ低いため、かなりの高待遇だったと思う。
- ・フィリピン人は時間にルーズで、授業のグループワークのために、現地学生と待ち合わせても、平気で1時間くらい遅れてきた。「交通渋滞だった」などと言い訳していたが、慢性的に渋滞が起きる環境だったため、あまり説得力がないと感じ、日本人の感覚で考えると苛立ってしまうこともあった。
- ・また、フィリピン人は「楽観的」という印象を受けた。台風で停電し、予備電力も無く、いつ復旧するのかわからない状況であっても、真っ暗な中ロウソクの灯りしかない状況で、いきなりギターを弾き始めたり、カードゲームをし始めたりと、「何とかなるさ」という様子だった。
- ・フィリピン人は、日本人に対して、「お金持ち」、「優しい」、「時間を守る」など、好印象を抱いている様子で、日本に憧れのイメージを持っている人も多いようだった。フィリピン大学には、日本の文化を学ぼうとする日比交流サークルもあった。
- ・フィリピン人学生とのコミュニケーションの面では、最初は英語で話をしているかと思うと、急にタガログ語が混じってくることもあり苦労したが、何とか両方を使いながら会話ができるようになった。

⑤留学して良かったと感じること

- ・留学経験を通じて、いろいろな環境に順応できる自信が付いた。日本と異なり、欲しいものが何でも手に入るわけではなく、治安が悪い。部屋にはシャワーがなく雨風が入ってくる。停電が頻繁に発生し、いつ解消するか分からないなど、日本にいては考えられない、体験できない生活を1年間送ることができたので、留学して良かったと実感している。

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

- ・日本の生活に慣れ親しんだ人にとって、フィリピンはあまり生活しやすい場所ではないかもしれないが、1年間の生活でとても愛着がわいた。今後も、旅行などで足を運びたい。

⑥今後について

- ・現在、3年生であり、今後、就職活動を行うことになるが、まだ具体的な分野、職種などについて、具体的なイメージがあるわけでない。しかし、留学生活では誰しも必ず、自分の思い通りにならないことを数多く経験し、それを乗り越えるために努力すると思う。そしてその経験は今後の自分にとっては必ずプラスになるだろうと感じる。
- ・留学を通して、日本の文化や生活、世界的に認められている日本企業の製品のクオリティの高さなど、日本の良さを改めて認識することになった。人生をずっと海外で過ごす生活は望んでいないが、期間を区切って海外に勤務するような仕事であればチャレンジしてみたい。

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

留学体験談 ～ 交換留学 ～

渡辺 理絵さん（関西外国語大学 英語キャリア学部 4年・敦賀市出身）

①留学先・期間

- ・大学の交換留学制度を利用し、大学3年の後期から9か月間、オーストラリア・ブリスベンにあるクイーンズ大学附属語学学校に留学（H25.10～H26.6）。
- ・休学せずに留学したため、現在は4年生。平成27年春に卒業予定。

②留学の動機

- ・関西外国語大学の英語キャリア学部では、卒業までに1年間海外留学することを前提としたカリキュラムを導入しており、自分も英語を本場でしっかり勉強しようと、交換留学制度を活用して留学することと決めた。
- ・留学先としては人気の高いオーストラリアを希望したが、学部内の選考の競争率が高く、選ばれたときは本当にうれしかった。

③学校での授業、学生生活

- ・留学先の語学学校では、主に「一般英語」、「ビジネス英語」、「コミュニケーション英語」を履修。30単位ほどが関西外国語大学の単位として認定された。他にも英語教師になるためのコースや、大学入学希望者向けの試験英語のコースがあった。
- ・日本人のほか、ブラジル人、チリ人、韓国人、中国人など、さまざまな国からも留学しており、多国籍な環境で一緒に学んだ。中でも、日本人、ブラジル人、中国人が多かった。
- ・現地の教員は、生徒の習熟レベルに応じて、聞き取りやすい英語を使ってくれたように感じた。
- ・午後、授業が終わってからは、2～3時間そのまま学校に残って、他国出身の留学生仲間と一緒に図書館で勉強したり、カフェで会話を楽しんだりしながら、「使える英語力」を高めてきた。また、関西外国語大学からは、ほかに2名の日本人学生と一緒に留学していたが、お互いに日本語は話さないように決めて、実践していた。

④日常生活

- ・関西外国語大学の方針により、寮ではなくホームステイで滞在した。ホスト

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

ファミリーは、スリランカとロシア出身の夫婦のお宅で、食費込みで月に8万円ほどを支払っていた。英語が非母国語の夫婦は、自分にとっては聞き取りやすいように話してくれた。ただ、夫婦の子どもとなると、英語が母国語のため、早口で聞き取りにくかった。

- また、ブラジル人、チリ人、韓国人、中国人などの留学生仲間の英語も、発音にクセがあって聞き取りにくかった。特に、南米出身の留学生は自己主張が強いところがあり、日本で育った自分としては精神的に少し疲れることがあった。
- ブリスベンでは物価が高いように感じた。例えば、日本で売っている500mlのコカコーラが350円程度するほどだった。しかし、安いお店もあり、工夫すれば、日本のよりも安い物が見つかった。



〔オペラハウスを背景に台湾人や韓国人の留学仲間と記念撮影（写真左から2人目）〕

⑤留学して良かったと感じること

- 英語については、特にリスニング能力が高まり、今では映画の内容がかなり理解できるレベルとなった。一方で、会話の方はまだまだ向上の余地があると自覚している。帰国後も英語力が落ちないように勉強やトレーニングを続けている。
- 留学を通じて、外国人と接することためらいがなくなり、度胸が付いた。間違ってもいいから、とにかく何か英語を話そうとする姿勢が身に付いた。

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

- ・また、自己主張の強い外国人と、コミュニケーションを図るためのスキルも覚えた。
- ・就職や金銭的な課題はあるが、再び留学をしたいという気持ち強い。



[シドニーのチャイナタウンで民族衣装を体験（写真左側）]

⑥今後について

- ・交換留学制度で、休学せずに留学をしたので、現在4年生。27年春に卒業予定であり、帰国直後から県内外の企業に就職活動を行ってきた。
- ・通常の4年生と比べ、就活スタートが遅れたため、焦りを感じてきたが、留学から戻ってきた学生を対象とした求人は、それほど少なくはないと感じた。
- ・現在は、大学での卒業研究の完成に向け精いっぱい頑張っているが、英語の勉強も続けながら、社会人として活躍できる準備をしっかりと進めていきたい。

渡辺絵理さんの留学体験談が、動画でご覧いただけます（近日公開予定）。

詳しくは、 [福井県アジア人材基金 youtube](#) [検索](#)

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

留学体験談 ～ 私費留学 ～

上田 つぐみさん（福井県立大学 経済学部 3年・坂井市出身）

①留学先・期間

- ・英語の語学学校「CARTHEL CNE1」（フィリピン共和国）に、2年生の後期終了後から私費留学（H26.2～H26.8）

②留学の動機

- ・幼いころから英語が好きで、語学力を向上させたいと考えていた。大学1年生の時に大学の短期研修プログラムでシンガポールに2週間行ったが、英語力が上がった実感が少なかったため、長期留学を志した。
- ・県外の大学に通う幼なじみと一緒に留学しようという話になり、会話重視のマンツーマン形式で英語が学べ、コスト面でも比較的安価と聞いたフィリピンかフィジーを留学先として選ぼうと考えていた。インターネットで情報を集めていたところ、CARTHEL CNE1の条件や評判が良かったので、ここに決めた。
- ・当初はフィリピンで3か月間ほど学び、英語の基礎力を身に付けた後、オーストラリアの語学学校に入り直そうと考えていたが、CARTHEL CNE1が非常に良い学校だと感じたため、期間を延長して、通算6か月間学んだ。
- ・大学は1年間休学しており、さらに別の国で英語を学ぼうと、現在はオーストラリアの語学学校に留学中。

③学校での授業、学生生活

- ・CARTHEL CNE1は、安価にマンツーマン形式での指導が受けられるため、講義形式の学校よりも、英語の上達スピードが速いように感じた。
- ・CARTHEL CNE1の経営者の1人は日本人であり、日本人を主なターゲットとしている印象。生徒は全体で50名ほどいたが、半分は日本人だった。学生よりも企業の語学研修で短期間来ている人が多く、日本以外の出身国としては、ロシア、韓国、ドイツなどだった。
- ・授業は平日の8～15時で、120分で1コマ（途中休憩あり）。なお、夕方にも授業を受けられるプログラムも用意されていた。
- ・自分は、ビジネス英語などの専門的なコースではなく、通常の日常英会話レベルを向上させるコースを選択した。授業ごとにテーマを決め、教員とマン

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

ツーマンで話し合う形の授業だった。

- ・CARTHEL CNE1の教員は、フィリピン人の女性が多く、日本人の指導に慣れている印象。例えば、指導に当たっては、日本人がショックを受けないように配慮して、言葉を選んでいるような様子だった。
- ・留学を始めて、1か月程度で何となく英語が聞き取れるようになり、3か月も経つころには、ほぼクリアに聞き取れるレベルとなった。スピーキング力は、聞き取りよりも早いスピードで上達したように思う。
- ・授業料は寮費（食事付き）も含め、月に10万円程度。現地の物価も、日本と比べかなり安価だった。

④日常生活

- ・CARTHEL CNE1は、マニラから北部に当たるターラック州サンマニユエル市にある。田舎町なので、特に治安が悪いと感じなかったが、現地のニュースなどでは、たびたび首都圏での殺人事件などの犯罪報道があり、マニラを中心に、エリアによっては治安が悪いと感じた。
- ・語学学校と寮がある敷地内には、大学や、幼稚園、看護学校もあり、外部者が立ち入ることがないようにしっかり警備されていたので、非常に安心感があった。
- ・CARTHEL CNE1では、全生徒が寮生活を送る。私は、4人1部屋を選び、一緒に留学した幼なじみと過ごした。残る2名については、1～2週間ペースで、日本人が代わりがわり入ってきた。
- ・15時に授業が終わった後は、さまざまなクラブ活動が用意されていたので、「ジャーナリズム（新聞・雑誌の読書会）」や、「EOP（英語だけを使って何らかの活動を行う）」、「ダンス」、「ミュージック」などに、積極的に参加するようにしていた。
- ・平日はキャンパスから出ることがなかったが、週末は、外に出て、買い物などを楽しんだ。授業料と寮費以外の出費としては、せいぜい月に1万円もあれば足りる環境だった。
- ・寮では料理が提供されるが、フィリピンの食事が合わず、スーパーなどで食べやすいものを買ってきて食べることもあった。また、ペットボトルの水は大丈夫だったが、学校のウォーターサーバーの水は合わず、おなかを壊すことがあった。

⑤留学して良かったと感じること

- ・英語力がかなり上達したと実感している。また、英語を積極的に話そうとい

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

う姿勢も身に付いた。帰国後に京都に旅行に行った際に、とある店内で、外国人と日本人の店員がもめていたことがあり、自分から英語で助け船を出し、解決につなげることができた。留学前は、「正確な英語を話さないといけない」と思い消極的になることがあったが、今はとにかく何らかの英語を口にできるようになった。



〔充実したCARTHEL CNE1での留學生活の卒業を祝うセレモニーにて（写真中央）〕

⑥今後について

- ・現在も大学は休学しており、9月からオーストラリアに改めて留学し、引き続き英語を学んでいる。
- ・将来は、福井県内での就職を考えているが、留学で高めた英語力を活かせる仕事に就きたいと考えている。

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国后面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

留学体験談 ～ 私費留学 ～

滝川 直樹さん（福井県立大学 経済学部 3年・勝山市出身）

①留学先・期間

- ・英語の語学学校「ILAC」（カナダ・バンクーバー市）に私費留学（H26.3～H26.6）

②留学の動機

- ・将来の就職などを考え、自分の中で核となる能力を身に付けたかったこと、また、大学には自宅から通っており、親元から離れて海外で生活することでたくましくなりたかったことから、留学を考えた。
- ・留学先としては、カナダかオーストラリアかで迷ったが、オーストラリアではなまりのある英語になるかもしれないと思い、カナダを選んだ。
- ・都市としては、「留学生の町」として知られるバンクーバーを選び、中でも複数の校舎を持ち、生徒も1千名を超えるなど、市内最大の語学学校であったILACを選んだ。留学情報サイト「JPカナダ」を通じて学校を探し、大学3年生次を1年間休学することとした。

③学校での授業、学生生活

- ・ILACには、ヨーロッパ、アフリカなど世界中から留学生が集まっており、特にブラジル人が多かった。アジア圏からの留学生も多く、韓国が最多であったが、日本人もかなりいた。生徒の年齢としては、大学生より上の世代が多い印象だった。
- ・ILACでは、1クラス15名程度で、レベルごとにクラスが分かれた。自分は入学当初、クラス分けテストの結果に基づき、上位から数えて5番目のレベルのクラスに振り分けられた。ちなみに、他の日本人は、下位5番目までのクラスに配属されることが多いようだった。
- ・午前中は、テキストを用いて、リスニングやリーディング、スピーキング、単語など、英語力全般を伸ばす授業を受けていた。また、午後からは、発音、スラング、単語など、テーマ別のクラスを選択できたので、自分は単語力をきたえるクラスを受講した。なお、ILACの授業料は、1か月で約11万円だった。
- ・自分の英語力が伸びていると実感できた瞬間は、留学して2～3か月経った

（注）この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

ころ、友人とバーで話をしていた時。アルコールが入る中、次から次へとスムーズに英語が口から出てきたときに、手ごたえを感じた。

- ・ I L A C への留学により、外国人同士で円滑にコミュニケーションが取れるレベルに英語力が向上した。ただ、現地人同士の会話やテレビで流れる英語は早口のため、十分に聞き取れないことがある。

④日常生活

- ・ 留学を開始して1か月間は、留学情報サイト「J P カナダ」(エージェント)を通じて選んだホームステイ先に滞在した。フィリピン出身者の家庭で、月に7万円を支払った。タイ米を使った料理があまり口に合わず、戸惑ったところもあったが、大変親切なファミリーだった。



〔留学先のクラスメイトとバンクーバー市内にて。日本人は自分だけ（写真右から2人目）〕

- ・ ホームステイ先については、留学前にエージェントに対して、「自分と同年代の子どもがいるファミリーを」とお願いした。この要望どおり、ホストファミリーには、自分と同年の大学生、そして中学生の2人の息子さんがいる家庭を選んでもらった。ホームステイ中は、二男のPOPダンス大会の応援に連れて行ってもらったり、体育系の大学に通う長男と一緒にジョギングをしたりして交流を深めることができ、大変楽しかった。
- ・ ちなみに、周囲の日本人留学生の話では、ホストファミリーと問題が起きた

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

り、生活や相性が合わなかったり、といったことがよくあるようだ。ホームステイを希望する人は、自分の要望をエージェントにしっかりと伝えることが大切だと感じた。

- ・2か月目以降は、違った環境に身を置いてみようと、ホームステイをやめ、ワーキングホリデー中の日本人と、アパートの一室をルームシェアすることにした。家賃、光熱水費、インターネット代などで月に6万円ほどしたが、学校に近い場所で交通費がかからず、炊飯器など、以前にこの部屋に滞在した日本人が置いて行った電化製品があり、好都合だった。
- ・バンクーバーにおけるルームシェアの募集情報などは、「J P カナダ」のサイトに多数掲載されており、とても役に立った。さすが「留学生の町」と納得できた。
- ・ILACでの授業が15時くらいに終わると、校内の図書館で勉強したり、友人とカフェに行ったりして英会話力をきたえた。ちなみに、行きつけのカフェは各学校に通う外国人留学生が交流する場となっており、いろいろな留学生とつながりが持てた。
- ・留学中は、学校以外の場においても、できるだけ外国人と一緒に行動するように心がけ、常に英語を使う意識を持っていた。



〔カナダ各地の旅行も留学の醍醐味。写真はロッキーでの一コマ〕

- ・ILACは、放課後や休日に各種アクティビティを用意していたが、特に自

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国後面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

分はこうしたものを利用しなかった。ただ、個人的に和太鼓の趣味があり、現地で日本人が子どもを相手に「チビだいこ」を指導していると聞いたので、週に1回自分も参加していた。

- ・現地で特に苦労したのは、携帯電話や、パスポートの代わりとなる在留資格IDの取得、銀行など、生活に必要な手続きを行う際の英語でのやり取り。専門用語が混じるほか、相手は早口なので、本当に大変だった。

⑤留学して良かったと感じること

- ・留学するまでずっと実家暮らしだった自分が、何事も自分でやらなければならず、しかも日本語ではなく英語で、という毎日を送ることで、自分なりに成長を遂げられたと実感している。
- ・これだけで満足せず、さらに英語力を伸ばし、自分自身もよりいっそう成長したいと考えたので、9月からは引き続きバンクーバーにある「99institute」という別の語学学校に入り直した。この学校は、日本人を相手にTOEIC対策を集中指導することで有名なので、ぜひ800点、900点をとれるレベルになるまで英語を上達させたい。そして、将来は、英語を使った仕事ができる会社に就職し、国際的に活躍できる社会人になりたいと考えている。

(注) この体験談は、福井県アジア人材基金事務局が、奨学金受給者との帰国后面談などをもとに作成したものです。なお、公開に当たっては、本人の了解を得ています。

皆さんの「海外留学したい！」を応援しています。



公益財団法人福井県アジア人材基金

〒910-1195 永平寺町松岡兼定島 4-1-1 (福井県立大学・経営企画部 大学戦略室)

電話0776-61-6000 (代)
<http://fukui-asianfund.jp/>

2014. 11